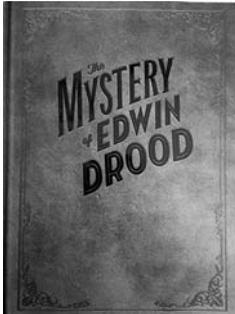


ミュージカル——エドウィン・ドロードの謎 (2016年3月～5月)

The Mystery of Edwin Drood: A Musical by Rupert Holmes



宮丸 裕二

Yuji MIYAMARU

本作はルーパート・ホームズが脚本、作詞、作曲で1985年に初演を迎え、翌年トニー賞・ミュージカル賞、楽曲賞、脚本賞、演出賞、主演男優賞を獲得している。これを新たに福田雄一が上演台本と演出を担当するかたちで日本公演を、東京、大阪、名古屋、福岡の四ヶ所で実現した。この小説が舞台化されて上演を実現することは1985年のブロードウェイにおいても現代の日本においても自然なこととは言えず、よほどのエネルギーが加わったことであることは想像に難くない。

そのことと恐らく関係しているのが、本作の内輪ネタと楽屋落ちの多さである。内輪ネタというのは芸能の世界の内輪のことで(芸能界に詳しい人には内輪の知識ではなく常識にしか見えないかも知れないが)、「モーツァルト」という単語を聞いて主演の山口祐一郎がガウンを着て舞台を駆け抜け、壮一帆が「某劇団」を辞めたてであることへの言及があり、それらしい誇張された立ち居振る舞いに「あの劇団の癖が抜けねえ」と突っ込まれる。そもそも完全に男性でしかない役どころを女優に演じさせる点には疑問を差し挟む人はいない。アニメの声優として名を馳せた平野綾にも存分にその点への言及が舞台の上でなされ、他にも「演劇界では有名なきれい好き」といった個人的特性もどうやら広く知られているらしい。こうした芸能人として知られている自分たちへの相互言及がどの場面にも多く登場する。

そして、そうした俳優がボケる度に観客は愛情の微笑みで包み込み、歌の場面になる度に歌が頭に入ってこないほどに鳴り止まない拍手を送り、もはや何も面白いことを言っていないにも関わらず俳優が驚いている演技や戸惑っている演技をするごとに抑えられない笑いが、意味以前に起こる。そうした客席のただ中に座っているアウェイ感はちょっと凄いものがあって、これは観劇そのものに関わってくるほどなのである。ところが、来る場所を間違えたかのような感覚は、

強い手拍子のその客たちの方が、こちら以上に抱えていることだろう。そう、私が観た公演は北千住の「シアター 1010」であったけれど、これは本来、日比谷は帝国劇場もしくは東京宝塚劇場における空気がここ北千住に持ち込まれたものなのだ。そうした場所での観劇のあり方が、この劇場でも支配的な空気を作り出しているのである。そもそも、誰も知らない『エドウィン・ドルードの謎』の平日の昼間の公演を最速先行予約で入手して、それが16列目なのがおかしいのだ。

一方で、楽屋落ちというのは、内輪ネタと似て非なるものがある。つまり、楽屋落ちはそこが舞台であるという枠を意識させ、敢えてそれを壊す試みを冗談を交えてやることであって、内輪ネタにはそこに更に個別の芸能人の有名情報が加わると考えればよいかと思う。楽屋落ちということに関してだけ言えば、ブロードウェイの元々の舞台がそうなっている。例えば本作の楽曲「主役は他の人」にも歌われる通りなのである。

どうも、文学作品を元にしたアダプテーションである、いわゆる「文芸もの」(映画も含め現在ではあまりそういうジャンルとして意識されなくなりつつあるが)というのは、その作品の前提や時代背景や設定環境を説明するためか、原作者の伝記的な興味からか、枠を二重にとってまずは舞台の原作を書いた作家の説明から始めるケースが多くなる傾向にある。ことディケンズのものは一層この傾向があって、ざっと考えるだけでも、以前劇団昴が毎年やっていた『クリスマス・キャロル』においても(ほぼ毎年内容を脚本から作り変えていたが)、一度ディケンズがフォスターやジョン・リーチらの仲間と共に演劇を始めるという設定でスタートしたこともあったし、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーの『ニコラス・ニクルビー』の例が思い出される。本作にも、舞台の枠の外側への言及が過剰なほどに持ち込まれているのである。実は山口祐一郎が演じる座長を中心とした劇団一座があり、それが『エドウィン・ドルードの謎』のリハーサルを開始して、舞台作品を作り上げている途中の過程を見せるという趣向をとっている。配役を決めるところから開始して、劇の半ばでもクリスパークルが立ち位置を間違えて座長が何度もスポットライトの下へ誘導するなど、常にこれが演劇であることを意識させるつくりになっている。

そして、こうした楽屋の舞台裏を見せ、楽屋落ちと共にあることの、最たるものが演劇の結末を観客みんなで決めるというものだ。一応、エドウィンは死んだという条件を所与のものとはするものの、探偵を5人のうちの誰が演じるかを座長が決める、今日の犯人を8人の内の誰にするかを観客の投票で決め、そして、最後のロマンティックな恋の歌を誰が歌うのかも女性8名男性6名の候補から2人1組を選ぶのでその掛け合わせた場合の数だけ結末があり得るという仕組みになっている。これはルーパート・ホームズが原作から仕込んだ趣向で、また画期

的とされたところでもある。ある種ポストモダンなやり方であり、当時の思潮背景を辿れば『大いなる遺産』で二つの結末をつけたディケンズの問題と関わってくるかも知れないが、恐らくそんな難しい意図があつてのことではなからう。むしろ、原作が未完なので結末をつけなければ演劇が演劇として終われないことが一つと、もう一つにはこれを契機に『エドウィン・ドルードの謎』の外側にある劇団一座の枠組みを作ってどうせならそれで遊んでしまおうということだろう。つまり、結末を観客みんなで決めるこの制度は、楽屋落ちと極めて相性がよいのだ。だから、こうした楽屋落ちや、主に冗談を通じて舞台の枠を壊す営みはオリジナルの舞台の中に大いに入っていて、この劇の大きな特徴を作っている。

そして、本公演における内輪ネタもこれに引きずられるかたちで出てきたものだろう。芸人やミュージカル俳優の個人の情報によって笑いをとるという内輪ネタの手法は、楽屋落ちと厳密には違って、そこではどの俳優でも置き換え可能ではなく固有で無二の特定の人気俳優でしか笑いを成立させ得ない。前述モーツァルトの件がそうであるし、この壮一帆に至っては退団後初登壇なのに途中で死ぬ設定だなんてあり得ないと大阪的な恐ろしくダサイ私服に着替えて舞台を降りて帰宅してしまうのである。壮一帆という個人に依存したストーリーと笑いの作り方である。

ただし、こうした芸人内輪ネタに関しては、現在のミュージカル上演の状況を見ると、この作品だけが異例ということは決してない。劇団四季などが例外であるが、おおよそかなりのミュージカルも、メガミュージカルでさえも、あるいはストレートプレイであっても、日本で上演されるものの多くがこれに依存している。特に「退団後女優」への言及はむしろ一般的であるかも知れない。近年の例で特にその傾向が強かったことで印象に残るのが『モンティ・パイソンのスパマロット』(2012年上演)である。こうした内輪の笑いにはメリットも大きいけれど、一方で欠点を考えると、その内輪の笑いに引きずられて本来の物語がねじ曲げられてしまうことさえあるということと、もう一つは、その俳優のことを知らない人には全く笑えないということだ。しかし、それこそ、「そんな誰もが知っているあるいはこれから知ることになる日本で有名な俳優さん」が出ていることなんて知りませんでしたという方が無知なのであって、「当然その人を見に来たんでしょ」と思う観衆の方が普通なのかも知れないし、だからこそチケットがこれだけの高額になっているのかも知れないのである。

実はこのことは歴史的な経緯を繙くならば時代に逆行する現象なのである。そもそも誰が演じるかが重要であった舞台芸術であったが、映画やテレビの普及によって他の誰かではよくないスターというものを映画やテレビの場に譲ったはずで、それ以降ミュージカルはメガミュージカルが通常になることで世界のどこで

も誰でも複製再現が自在な芸術になると共に、その技術がある俳優ならば誰が演じようと、代役だろうと、トリプルキャストだろうと同質のものを提供できる芸術になったのではなかったか。けれど、そうではなくて、この俳優さんが観たい、この女優さんに演じて欲しいという世界に逆戻りしている傾向があるのである。中には宝塚を辞めたばかりであるという事情など知ったことじゃなくてその退団とは全く関係なく進む芝居もあろうが、一方で、宝塚を辞めて一本目であることはその筋のファンからすると演劇の内容などよりずっと重要なことなのである。そしてこの場合、外的環境を一切排除して一つの劇を作ることと退団後初登壇であることを前面に押し出すこととの二つでは、当然後者が優先されて然るべきなのである。なぜかという、普通に考えたら日本では上演される機会を得がたいであろう『エドウィン・ドルードの謎』の上演を彼女らが可能にしているからである。その俳優と女優、そのサポーターなくしてはまず実現しないことに疑いの余地はなく、日本の多くの舞台作品がキャスティングを見る限りそうした事情を抱えていると言わざるを得ない。

物語内容や演出などよりはまずは俳優なのである。だから、この犯人を投票で決めるという、自ら設定したシステムと相容れない結果を招くこともある。つまり、犯人を演じて欲しい人はファンの数で決まるので、私が観劇した日の公演で票を集めた犯人は、帝劇での活躍で知られるパファー、次位がやはり帝劇での人気者が演ずるジャスパー、次いでアニメ界でも人気のローザ・バッドであった。どうしても外部情報による人気投票になってしまう結末までは、ちょっと日本に移植した際には想定していなかったことなのではあるまいか。

従って、いくらかの問題点があろうとも、あるいは観劇の楽しみ方が少なからず変質しているように思われても、こうした俳優への自己言及が不可欠な舞台状況と平日の昼に女性ばかりが集まる日本の観劇環境とが日本の幅広いタイトルの上演を支えているのだから、文句を言っただけはいけない。ファーストクラスに乗る客が存在するからこそ飛行機の運航が可能になり、エコノミークラスに座る我々がそれでも飛行機で旅することができるのである。そして、「文化的なる」彼女らのこと、意外にして次の公演の原作は全て読み尽くして絶版本を復刊に至らせるほどの勉強家集団であり、教養を広めるという意義も演劇が担うに至っているのかも知れない。そして、特にこの『エドウィン・ドルードの謎』は、元の脚本に楽屋落ちが頻出し、それが引き金となって今回の日本版でも他の舞台にも増して多くの内輪ネタを誘導しているが、元々そう宿命づけられているところがあるのである。本作を遺作絶筆によって、一番最初に内輪ネタにし、楽屋落ちに持っていったのは、他ならぬディケンズなのだから。

最後に付け加えると、当日演じた俳優の歌の技術は粒ぞろいで、歌を歌ったど

の俳優も全て一級に歌が上手かった。いくつミュージカルを観てもこういうことにはほとんどお目にかからない。もしかすると、その点もまたここに言う、俳優に依存し、俳優でまわすミュージカルの侮れない点なのかも知れない。